

知恵を養う(2)

コンサルタント・ファシリテータ

野島 勇

Isamu Nojima

nojima@sra.co.jp

デジタル大辞泉によると、**知恵とは「物事の道理を判断し処理していく心の働き。物事の筋道を立て、計画し、正しく処理していく能力」**とあります。前回、現実と理想の溝を埋め、実行、検証する能力を狭義の知恵と呼ぶことにしました。そして、PDS(Plan, Do, See)を適切に行う能力こそが狭義の知恵であると書きました。

今回は知恵を養う活動の一つとして「ふりかえり」を取り上げ、知恵を養うにはどうするのかを考えます。

◆ふりかえり

ふりかえりとは、過去の活動を振り返り、学び、未来を創り上げていく活動です。毎週 30 分、もしくは毎月 2 時間の枠を設け、開発チームのメンバ全員(1~20 名程度)が集まって話し合いを行います。決められた時間の枠のなかで、各人が思うノウハウと問題点をメンバ全員で共有し、改善のための施策を決めます。

例えば、次のような手順で行います。まず、ふりかえりの目的・手順・ルールを共有して合意を得ます。次に、各人が思うノウハウや問題点を付箋紙に書き出します。付箋紙に書かれた内容を共有し、互いの考えを理解します。共有した後、問題点を整理し、最優先で取り組むべき問題を選びます。選ばれた問題について、改善策を決めます。改善策は、A4 用紙に改善策のアイデアを書きだし、書き出されたアイデアを参考にしながら改善策を考え、考えた改善策について賛成／反対の意見を訊きながら深める

といった手順で決めます。最後にふりかえり自体をふりかえり、終了します。

◆物事の道理・筋道を知る

ふりかえりの目的は、改善を重ねてより良い未来を手に入れることです。ふりかえりは、毎週もしくは毎月実施します。何度も繰り返しながら、徐々に現実を変えていきます。その過程では、「何をしたら、どうなるのか」といった、**物事の因果関係を理解していく**ことになります。「ふりかえりを通じて決めた施策は、結果としてどうなったのか」を観察することで、物事の道理を理解していきます。

しかし、私達は**物事の道理を理解するにつれて、現実是不変だと思ひこみます**。「現実とはこういうものだ」と学びます。経験を増やすに従って、私達は知ったつもりになります。一人の人間ができる経験は限られたものであることを忘れて、それが現実の全てのように錯覚します。自分が信じていることを証明するように、現実を解釈します。私達の見方は偏っています。見方が偏っているために気付きません。見方が偏っていることにすら気付きません。

こうして、**物事の道理を理解しているように錯覚するだけで、実際に物事の道理を理解することはなくなりま**す。私達が道理を完全に理解することはあり得るのでしょうか。

◆誰でも思い込んでいる

見方が偏ることは仕方のないことです。知らないことも仕方のないことです。それらは恥ずかしいことではありません。もし、恥を感じるべきことがあるとするならば、「見方が偏っていること」と「知らないこと」を認めないことではないでしょうか。認めるからこそ他人の声に耳を傾けられます。認めるからこそ知ろうとします。

私は、**知恵は誰しもが持っている能力**であると考えま

す。知恵は持っているが、知恵の発現が妨げられていると考えます。「わかったつもり」にさせる思い込みこそが、**知恵の発現を妨げる**ものであると観ます。わかったつもりになると、物事の道理を知ろうとしません。目の前の現実を見ずに、過去の記憶や知識ばかりを見ます。そうして、過去には有効であったかもしれないけれど、目の前の現実にとっては不適切であることを行います。

「わかったつもり」になることは仕方のないことです。仕事をしていると「わからない」では済まされない雰囲気があります。確かに、「わからない」とばかり言っていては、信頼を得られないでしょう。わからないことについて、私達は自分を責めて、罰することがあります。**裁くことは知ろうとすることを妨げます**。裁くことは、知ることよりも対処することを促します。こうして、知ること、考えることもせず、ただ行動ばかりするようになります。裁くことも道理の理解を妨げ、知恵の発現を妨げます。

わかる必要があるのでしょうか。わかるのではなくて、考えることが大事なのではないのでしょうか。

◆観察こそが知恵

観察、すなわち、見ること、聞くこと、知ることが知恵の発現を促します。他者と話すなかで、自分自身の思い込みが顕になります。思い込みに気付くことが、知ることを更に促します。そうして、過去の記憶や知識ではなく、目の前の現実を観察するようになります。目の前の現実を観察し、人の声を聞いてみると、そこには問題を解決するヒントがあります。見ようとしなければ気付けないことがあります。

私は、**目の前の現実をただあるがままに観察する能力が知恵**であると考えます。近年の組織開発や心理療法の成果をみていても、ただあるがままの現実を観察することが役に立っているようです。

◆おわりに

知恵という何とも掴みどころのないテーマを扱ってみたいですが、如何でしたでしょうか。抽象的な話となり想像しづらかったのではないかと思います。本稿の内容を日々の生活に照らし合わせ、観察して頂けたら何か思い当たることがあるかもしれません。みなさまの意見を聞かせて頂けたら幸いです。

◆◆◆◆ 今さらながらのモデリングツール再考 ◆◆◆◆

コンサルタント 栗生木徹

最近、新人研修でオブジェクト指向分析設計を担当しました。そこで、個人的になんとか気持ち悪いと感じていたことを思い出したので、書いてみたいと思います。

世の中に、モデリングツールってありますよね。例えばUMLモデリングツールなら以下の primitive な特徴があると思います。

1. UMLのモデル（図）が書ける
 2. モデルの各要素を一元的に管理する
2. はシーケンス図上のある操作を変更すると、その操作を持つクラス（クラス図）に、変更が反映されるということです。さて、1. は良いのですが、2. はツールを使っていると、「この変更をXX図には反映したくない」と思うことがあります。例えば、シーケンス図には反映したいが、ドメインモデル（クラス図）には反映したくない、ということです。これは工程間のモデルの目的の違いにより起こります。

今、設計工程にいとましましょう。既に要求・分析で作成した図や要素が存在します。設計ですから、設計要素を盛り込み、設計モデルを作成していきます。ここで何が起るかというと、分析で作成したモデルにも設計要素が「自動的」に反映されます。

分析と設計では目的が違います。分析で作ったモデルは変更せず、設計で作ったモデルにのみ変更が反映されて欲しいのです。分析モデルに設計要素が入ると、情報過多で見づらくなります。反復開発の場合、分析と設計は繰り返されるため、最悪です。まあモデルファイルをコピーし、分析と設計用とに分ければ良いのですが、管理が複雑になります。

そこで「こんなモデリングツールがあったらいいなあ」を考えてみました。上述したことの裏返しになりますが、

- ・変更を反映するモデルを選択できる
- と良いと思います。分析モデルには反映しないが設計モデルには反映する。皆さん、こんなツール、いかがでしょうか。
#「プロセス依存度が強いんじゃないの」、「そもそもの発想がニッチでニーズがない」とか聞こえてきそうですが…。うん！？、実はもう存在しているとか…。

この話、続きがあるのですがスペースの関係上、別の機会にしたいと思います。

夢を。



GSLetterNeo Vol. 35

2011 年 6 月 20 日発行

発行者 ●株式会社 SRA 産業開発第 1 事業部

編集者 ●土屋正人、柳田雅子、小嶋勉、野島勇

ご感想・お問い合わせはこちらへお願いします ●gsneo@sra.co.jp

株式会社SRA

〒171-8513 東京都豊島区南池袋 2-3-2-8

夢を。Yawaraka Innovation
やわらかいのべーしょん